



昭和46年(1971年)

9月号(No. 315)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文

細雨に霞む六義園	1
「極東の遊歩場」	2
「山岳」と「山」	2
厳冬期燕岳スキー初登頂の記録	3
第三回図書交換即売会	3
登山不毛の二年半	7
パイプとコーヒー	7
1971年のヒマラヤ(日本隊)	
高野山大学調査隊	4
東京アンナプルナ会	4
1970年ポスト補遺	
デオ・ディバ	5
メラ・ラのトレッキング	5
ロブソン山	5
図書室便り	
図書受入報告	8
図書委員会報告	9
会務報告	
会員異動	9
新入会員	11
その他	
ダマンからのヒマラヤ展望	6
袋一平さんのこと	8
山崎和氏	8
ペルー登山について連絡	10
ネ政府9隊に登山許可	10
エベレスト登山73年までの申請	11
アルゼンチン・エベレスト隊	11
マカルー頂上の日章旗	11
台湾玉山登山計画	11

細雨に霞む六義園

成瀬 岩雄

今年度の六義園における例会は六月十二日に、申込者全員出席という、從來にない盛會に終わったことはまことに慶ばしいことであつた。当日はあいにく、朝からの雨天であつたが、大體、この会が入梅期に毎年行なわれるから、それは止むを得ないとしても、雨の六義園もまた、なかなか風情を添え、捨て難いものである。

眼覚めるような、新緑の美しさに加えて、菖蒲やアジサイの多彩な色を交えて、静かに池面を打つ細雨を眺めていると、暮色ようやく迫り、雨にかすむ森のあたりから音もなく静かな炭焼の煙でも一本、スーと上つて来るのじやないか……と錯覚をおこすような、一幅の日本画でも眺めているような気がするのだ。鬱蒼たる樹木の間を縫って曲りくねった路を木間越しに見る燈りをたよりに、葦づきの心泉亭に近付いた時には、ツイ、先月、独りで歩いて来た会津の山村の静けさに思いを新たにするのであった。

いかにも山岳会らしい「場所と時を得た」会場ではなからうか。特に、清水谷皆香園時代を知っている古い会員の方々にとっては恐らく懐古の情、押へ難きものではないかと察するのである。

本会の会合も、時には現代風のいわゆる、近代建築の講演会場も必要ではあるが、この六義園のような、環境に恵まれ、降ってもよし、晴れてもよし、というような会場もまた捨て難いものではないだろうか……。それにこの六義園の会というものは山岳会の歴史的意味からいっても重要な会合といつても差しつかえないのだ。

そもそもこの六義園を常例会場にしようになったのは、古い会員の神谷、岩永両氏の発議が元祖で、それは、昭和三十六年六月が最初であつたと思うが、それ以前に神谷さんはわざわざ清水谷の皆香園を何年振りかで訪ねられ、その周辺があまりにも無残に姿を果てているのに驚かれ、どこかこ

れに似た場所有ないものかと物色の末、岩永さんと共にこの六義園を見出されてようやく昔の清水谷時代を懐古するに足る、満足を得られたことをもつてこの例年の会合は続けられて来たのである。当日、世話人の一人として一役買った小生も、その昔、清水谷時代には末席を汚したこともあり、また、雨に煙る皆香園の美しさも未だに脳裏に残っているから、山岳会の古い会員の中でもこの会合だけは最も楽しみに、待選しい会合でもあるのだ。

もともと、清水谷時代には小生は勿論、末輩、若輩で、会員にもなっていない時代、高頭さんを初め、創立者の居並ぶ前に、コソゴソ、文字通り末席で小さくなって坐つていて、雲の上人のような大先輩の方々の談笑を一語も聞き流すまじ……。まして会員になどとも入れて貰えないと諦めていただけに小生にとつても、この会合は小生なりに貴重な思い出でもあるのだ。忘れもしない……。この六義園の第一回の日は幸い好天気にも恵まれ、時、あたかも、懐き人を隊長するマナスル登山の第三回目で、いよいよ登頂の朗報が今日来るか、明日来るかと会員一同が鶴首、待ちわびていた頃だっ

たので、その日も当然、出席者一同これが話題として賑わい、あの第一回のスタートは小生にとつては忘れ難い日でもあつたのだ。

清水谷時代の常席者にして、しかも、あの年令にもかかわらず、つとにヒマラヤ研究の第一人者といつても差し支えなかった末輩さんでも「今日、なお、健在だつたら……」と小生は独り、心中、考えたのを今に忘れられないのだ。

末輩さんの山に対する熱意は、いまさら、小生の如き若輩があらためてここに出す資格もないが、あの熱意振りは、南極の白瀬大尉にも匹敵すると小生はかねてから、独り決めていたし、洋傘一本に、握り飯の風呂敷を腰にブラさげて乗鞍岳の野天に一夜を明され、夜中に放電作用で髪の毛がイラ立った等という、末輩さんのお話を思うにつけ、末輩さんだつて唯一の燃料たる炭俵をゴソソリ積んで行ったという白瀬大尉に比肩する、ヒマラヤ探検家にまでなられたに違いないと思つていた。今日、われわれ会員の仲間がマナスルに出掛けたなどということを知られたら恐らく衷心より喜んで下さる大先輩の一人であるに違いないと小生

は独り考えたのだ。

何んといつても山岳会は古い会。伝統に輝く。伝え聞く昔の話の楽しさ……。そんなことを考えると、この六義園の会合は山岳会の昔からの「講演会場兼茶話会」たりし皆香園の延長で、有志晩餐会のとまでは、別の意味で、将来も末永く続けて行くべき有意義な会合の一つとして、われわれ若輩の責任、義務でもあるのだ。

最後に一つ、この六義園の第一回から殆んど毎回出席であつた大先輩の御両人のうち、近藤さんが先年他界され、田部さんが御病身のため今年はお顔が見えなかったのは何んとも残念、一抹の淋しさを覚えたのは、出席者一同も恐らく同感ではなかつたらうか。近藤さんのようにあれだけ晩年まで会を愛し、心からクラブ・ライフを楽しまれ、人物温好に語ることもしばしば……。にもかかわらずわれわれ若輩、末輩をして知らず知らずの内に尊敬の念を抱かした先輩を亡くしたといふことは山岳会のためにも大きな光明を失つたようなものではないか。

それでも今年は、オリジナル・メンバーた一人の生存者たる武田さんの御出席があつたことは、まさにこの会に錦をそえたものだった。回を重ねるごとにだんだんオリジナル・メンバーが減つて来てしまつたのはやむを得ないことながら、八十八歳にしてなお矍々たる武田さんが、田部さんや近藤さんに代わつて出席して下さったことは、この会にとつてまた新たな光明を与えたものだ。

われわれ末輩の知る由もない山岳会の創期時代から現代に至るまでの、いつもの、先生独特の適当な皮肉や諧謔を交えたお話には出席者一同、思わず箸を置いて聞き入るのだった。

(四六・八・三)

「極東の遊歩場」

島田 巽

ウエストン祭の朝はいにくの雨であった。碑前祭も二十五回目だったので出かけた。「君なんか来るから雨なんだ」と出あいしがしに佐藤久一朗先輩に叱られた。なんだか自分の責任のような気がしたが、幸い佐藤さんの挨拶の気には、雨もあがつてくれた。やはりレリーフ作者への敬意からなのだろう。

そのお祭りのあとで、山崎理事から岡村精一さんを紹介された。いわずと知れたウエストン師の「日本アルプス」の訳者である。この訳書が梓書房から刊行されたのが昭和八年のこと、早速読んだのはもちろん、いまでも書架に蔵しながら、いまだ岡村さんとあいさつを交さなかったとは、むしろ不思議な気さえて、やはりこのお祭りの縁かと思つたのであった。

その折、山崎さんから岡村さんがウエストン師の第二著である「極東の遊歩場」The Playground of the Far Eastをすでに訳出されていることを教えられ、帰京後、岡村さんから早速、その訳書の惠贈を受けたのであった。これも全くつかぬ話であるが、この本は昨年はじめにすでに世に出ているのに気づかず、いたわけである。

ウエストンの Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps の訳書は、わが国に広く読まれ、すでに文庫本にも入っているほどだが「極東の遊歩場」の方は原著を持っている人も比較的少ないのではないかと思う。題名から日本の山歩きが連想されないために、見のがされがちなのかも知れないが、アルプスの古典の一つ

レスリー・ステイブンの「The Playground of Europe (一八七一年刊)」を知る人々には、ウエストンさんの題名は直ちにうなずけるはずであった。

第一著「日本アルプス」が一八八八年(明治二十一年)以降八年間の北、中央、南アルプス踏破の記録であるのにつづいて、第二著の方は一九〇二年(明治三十五年)から三年間、一九一二年(明治四十五年)から三年間に、やはり同じ山域を登りかけた紀行文を主としている。前者はウエストン二十歳から三十四歳までの、後者は四十歳台と五十歳台とにわたる活動を取めたもので、この二つの著書によってウエストンと日本の山とのつき合いの全貌が分かることになる。

「日本アルプス」の原著一冊が偶然のことから岡野金次郎氏の目にふれて、岡野、小島島水両氏のウエストン師訪問となったのは、明治三十五年のことだった。(小島島水著「アルピニストの手記」所載「ウエストンを繞りて」にそのいきさつが詳述されている)ウエストンの第一著は、日本山岳会設立の直接のきっかけとなった点で、本会との縁の深さは周知の通りだが、第二著について特記しなければならぬことは、すでに誕生した日本山岳会の創立者たちと著者との友情が、この一書のなかに包蔵されている点である。ウエストンはこの一書を日本山岳会の友人たちにデイクートしているし、その表紙には、山を表わす三角の模様の中心に六角の雪華を置いた日本山岳会のバッジ(現在の略章に同じ)を金判で押して、その下部に日本山岳会と漢字で入れている。その上、志賀重昂を煩わして「日本山岳会の会員へ」と副記した序文まで掲載しているのである。本文のなかに本会の大先輩たちの名がしばしば出てくることはいうまでもない。

この訳書には、日高、三田両先輩の「あながき」が収録されているので、いまだ私などが、わかりきったことを云々するのともうかと思つたが、この会報に訳書についての紹介がなされなかったのは、原著と本会との関係がらいつても、片手おちのような気がする。「日本アルプス」をすでに読んだ方々にも、本会名譽会員であったウエストン師の足跡の全貌を知るために、ぜひ第二著を読んで欲しいと考える。そして、六、七十年前のわが国に対する一英国人の文明批評を、本書のなかに見出すことも、予期せぬ収穫であらうと思う。

造本その他について、私なりの意見もあるが、ここでは、大変おそまきながら「旧刊紹介」を行って、ウエストン祭の雨へのつぐないとする。

(山と溪谷社刊・千五百円)

「山岳」と「山」

—— 誌名のことなど ——

小野 幸

この会報「山」の三三三号に望月会員は「会報の誌名」を「山」と改題して一年から「会報」を「山」と改題したのは、当時会報の発送費を軽減させようという目的で、第三種郵便物認可を得ることにあつたが、その後何回かの折衝にもかかわらず、ついに今日まで実現を見なかつたこと、と「会報」という名の失われたことを残念だと述べられていたことは、皆様ご承知のことと思います。これを読んで思い出したことは、その文の中に「その後何回かの折衝」とあります。「何回」の中の一回は、わたくしが折衝したことがあるのでした。

以上定期に発行すること、二つは内容が公衆的なものであること、三つ目は、たやすく貰うことができること、三つのことであります。この条件だけで可ならこの「山」はまがりなりにも認められるでしょうが、その他のちいさな(こちらにとっては重大)条件のいくつもの中に、会報はいけないという点であります。ですから会務報告、会員異動、新入会員などの記事は絶対にせられぬわけでありす。わたくしの折衝のときも、この点で道はとどめたのでした。

その他の条件は広告が半分以上あつてはならないとか、千部以上の部数が必要ではないとか、およそ「山」には問題にならないことばかりなので、しかし、内容が会報であつてはならないのでは、会報でなくつては、会報の役目が立たなくなるわけでありすから、どなたが何回折衝されてもだめなわけであり、ほかの方が折衝されたとき、きつこの点でもひつかかつたことと思います。

また、望月さんの言葉をつづけますが、第三種にするために「山」と改めたのだが、その必要のなくなった現在では、一日も早く創刊以来使われていた「会報」と改めるべきではないか、といわれまふ。

これを読んで、わたくしもハッとて、そうだったんだな、と「会報」時代を思い出しました。

しかし、そう言われれば、それもさうだと考えて見ましたが、一方、「山」とも四年以上のおつきあいになりますと、急に、お前なんて、もういらねえよ、とここで急にキッパリおこたわりするもの、すし、かわいそうな気にもなつてまいります。そでふり合うも他生のエンと申しますか、なごりのおしまれるのも人情。そんなことでもないやんといふう

へラトへ出発の前に

堀 正彦

六月十九日カブル入りした後偵察をかね奥の方にトラックで様子を見てきました。どうにもひどいところで、夜は寒く、屋は全く暑く、すごいほこり、水も食事も十分でなくとんでもないところ。しかしいっぺんの砂漠ではなく三千mから四千mくらいの高原状のところ。あす(ヘラト)へ出発します。横断旅行はラクダと考えてきましたが、馬も購入しました。全くの一人旅ですが、全行程約九百キロを四十日くらいで乗り切るつもりです。カブルのアフガニ人に時期が過ぎるころ、強盗の多いところを引き止められましたがやってみるつもりでおります。馬は途中つぶれるでしょう。(七月二十二日カブルで)

— 登山史の発掘 —

厳冬期燕岳スキー初登頂の記録

山崎 安治

これも僅かな記事を手がかりとしてさぐり当たった厳冬期における北アルプス燕岳初登頂の記録である。最初の手がかりは、日本における積雪期登山と岩登りのパイオニアの一人であった故板倉勝宣氏の遺著「山と雪の日記」(昭和五年三月刊)である。黒いラシヤ紙の表紙に銀のエーデルワイズをあしらったこの清楚な遺著は、日本の登山史上からいってもきわめて重要な位置を占める書物だが、その中の「雪の信飛連山とスキー」という論文は、ようやく黎明期を迎えた北アルプスにおける積雪期登山の現状と、その将来についてふれたもので、大正十年十二月の日付けで「山とスキー」十号に発表されたものであった。この中で板倉氏は次のように述べられている。

『まず私はあの連山の過去におけるジ・スプールについて、私の知っている範囲を書き出してみたい。第一のスプールは独逸の人々によつて印せられた。頂上には達しないにしても、乗鞍岳、穂高岳、焼岳、徳本峠、白馬岳にスキーを踏み入れたのは、二、三の外国人であった。それに次いで日本人が徳本峠を越えて乗鞍に行き、常念、槍ヶ岳、燕岳、白馬岳、立山等にスキーの跡を印しに行った。その大部分は春の硬雪期に行ったもので、私の知る中では、一月の燕岳を唯一の例外としている。(中略)燕岳は雪が割に少なかったために、夏の路を登っている。冬のことではあるし、スキーにとっては、いい路ではないが、かじりきより遙かに楽であったそうである。』

これと比べると、大正六年(あるいは八年)三月横浜のグリンペンベルグ、ウインクラ、両氏のことと思われる。これについては大島亮吉氏が、遺著「山・研究と随想」の中の「雪崩の知識に関する一寄与」の中で、両氏は乗鞍岳登山の帰途、中尾峠と徳本峠を越えているとごく簡単にふれている。(この正確な記録は不明である。山崎繁峰著「日本スキー発達史」の中に加納一郎氏の調査に基づくという「本邦スキー登山征頂記録」に大正初期、年月不詳として奥州人三名氏名不詳が槍ヶ岳、穂高岳、常念岳登頂としてある。これについて加納氏に直接問い合わせたが、この本は正確なことが書いてある、この信用出来ない、という返事を得ただけであった) 日本人バードイによる常念、槍といふのは大正八年三月および大正九年四月板倉氏によるもので、これは「山と雪の日記」に収められている。また白馬岳、立山は富山の内山数雄氏一行によるもので、立山試登は大正九年三月で、大正十年二月発行の中学世界第二十四巻四号、白馬岳は大正十年四月で、これも同じ中学世界に越後側からの積雪期初登頂の記録が発表されている。信州側から大正九年三月慶大の島亮吉氏一行が杓子尾根から試登し、「登高行」二年に「わし」の記録がある。ところが問題の厳冬の燕岳初登頂の記録がわからない。目ぼしいものはたいてい、ひとくちかえしつけない。しかし松方三郎著「遠き近き」を何の気もなくばらばらひろい読みしていたとき第二

の手がかりが得られた。「冬の旅」という章の中である。「中房から冬の燕に登ったのは北海道に渡った翌年だったから大正十年の正月のことだ。中房といつても相客があるわけではなし、番小屋に赤々と寝たのだが、温泉だけは素晴らしい。雪もきつて音をたててうなやうなうたうたうたうた、湯から出すと手ぬぐいがいきなりボウのように固くなってしまふのには驚かされた。燕から見た冬の大槍や高瀬の谷は、思っていた通りの美しいがめだつた。「へちま」と呼ばれた、またその名通り「へちま」然としていたYなるその時の相棒は学校を出て間もなく亡くなつてしまつたが、とにかくその相棒と二人切りの旅で、ひっそりと谷に入り、温泉につかり、山に登って、まことに静かな楽しい数日であった。すぐ永年の疑問がまた一つ解決した。すぐ松方さんにかがたつたところへ「へちま」といふのは仲間、山崎深造氏のことだ、案内は島山善作といふことも判明した。松方、山崎の二人はスキーで登り、善作は輪かんじきだったが登りも下りもスキーの二人に負けずに頑張りつてきたという。

厳冬期燕岳初登頂のこの記録は、これまで全く知られていなかったため、厳冬期における北アルプスの記録としては大正十三年一月早大バードイによる槍ヶ岳登頂の記録が派手に登山史上にもあつたかわれているが、学習院バードイにもつたこの燕岳の記録は厳冬期初の、というより日本アルプスにおける最初のスキー登山成功の記録として重要な意味を持つものといわなければならぬ。私が松方さんから同行者や案内の名前をお聞きした、この記録の概要がわかつたのは、日本山岳会が創立六十周年を迎え、その記念行事を進めているときのことであった。昭和四十一年

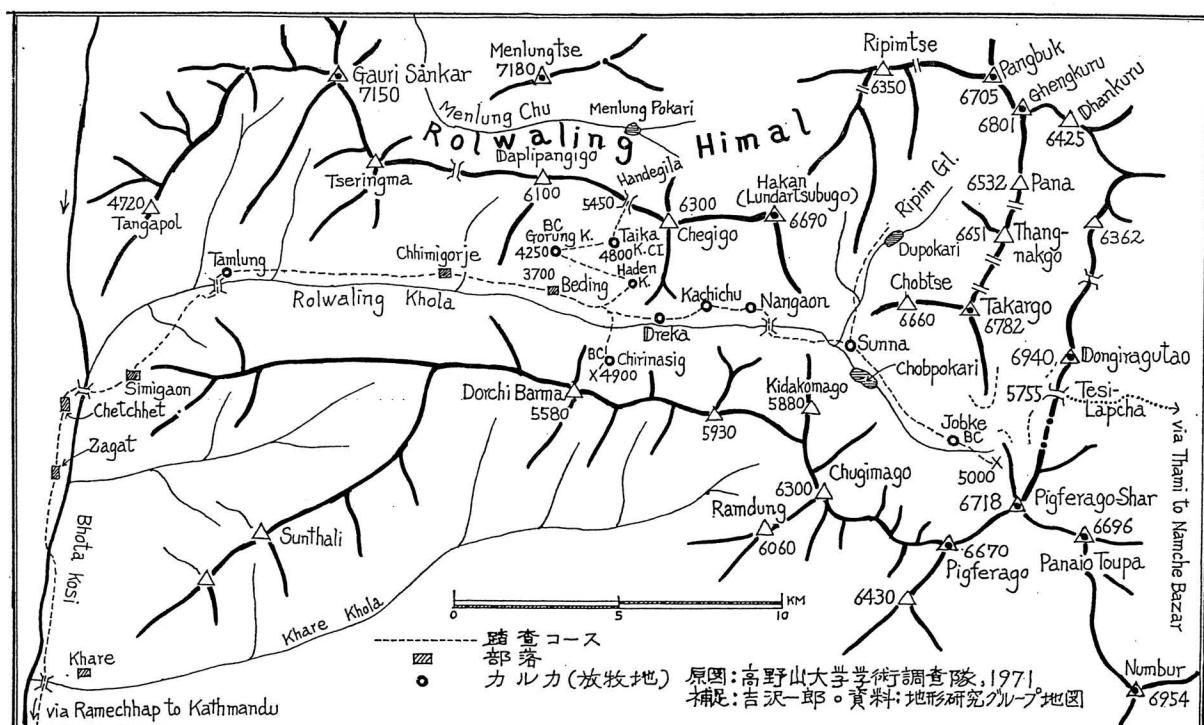
年の春ごろである。四十五年間そつと胸の中に松方さんはたたまれていたのである。「日本山岳会創立六十周年記念展」の目録の中の「日本主要登山年表」に私はとくにこの記録を感慨をこめて書き加えた。

この冬の燕岳登山について、松方さんはいま一つ文章を書いている。串田孫一編「忘れぬ山」第三巻(昭和三十四年発行)の「燕から槍」への中の結びに次のように書かれてある。『燕にはそれから五年して、大正十年の正月にスキーで登ったことがある。もうその時には今の登り路は切開かれていた。冬のことだから、夏路はどうでもよいようなものだが、雪の深いあの森林の中を上つたので、もう往年の苦しみはなかつた。この時も善作がついてきてくれた。彼の輪かんじきとぼく等のスキーとが大体同じ速さで上り下りしたのだから、腕のほどは推して知るべしだが、例の尾根に出て、谷越しに見た冬の大槍のすばらしさは何にもたとえようのないものだった。』 これも今日となつては、とりたてていふほどの山登りではない。ただ、ぼく自身の山登りのクロノロジーの中では、この冬の燕はなかなか大きな地位を占めているのだ。そして善作と、温泉の留守番とわれわれ二人と、たった四人で暮した中房の正月も忘れられないのである。』 なお、大正七年三月田中喜左衛門、杉若金一郎、葉谷忠三郎三氏の徳本峠、上高地、中尾峠越えは「山岳」十二年三三の会員消息欄に出ている。『さて今回、山岳会員にして、わが関西スキー倶楽部員たる杉若、葉谷三君と共にスキーにてアルプス越えを試み候。』 三月二十二日鳥々を発し、徳本峠を越るころより大吹雪に出遇い、面を向くべくもあらず、信号の笛が唇に凍り

付き、睫が氷るなどの困苦をなめ、辛うじて上高地温泉に着し、二十三日は焼岳にて大いに遊ぶ計画なりしもまた吹雪のために終日籠城致し、二十四日中尾の峠を越えて蒲田温泉に滑降いたし候。それより後は、雪はただ日陰に残るのみにて到底滑走を続け得べくもなく、やむを得ず船津を経て越中笹津まで徒歩して昨日帰京いたし候。』 島々清水屋主人の言によればスキーにては昨年横浜の外人二名の一行が初めて上高地に遊びたるも、この時は再び島々に引返したる由にて、信飛國境の横断は今回の小生等の一行が最初を試みなる由申し候。これによりてみれば、わが国のスキーの行なわれてよりすでに数年いよゆる多士済々の観あるにかかわらずいまだかくのごとき山地の跋涉に多くの研究を進められざるがごとく存せられて、日本スキー界のために甚だあきだぬ心地いたされ候。(大正七年三月二十八日京都にて田中喜左衛門)

第三回図書交換即売会

ことしの図書交換即売会は、三回目を迎える。日時は十月二十三日(土)午後二時から五時まで。場所は本会ルームと例年通りである。東京付近在住の会員には、会報の八月号に出品申し込み用紙を同封して発送したが、多くの会員から次ぎ次ぎに出品の申し込みが図書室にとどいていく。「山の憶い出」、「山行」、「日本風景論」などのいわゆる目玉出品もあり、こしも盛会が予想されている。地方在住の会員で、どうしても出てきたいといわれる方で、寝袋持参で前夜ルームに泊り込みくらの覚悟の方なら、ご便宜をはかりたいと考えているので、あらかじめ図書委員まで申し込んでいただきたい。(山崎)



一九七一年のヒマラヤ

日本隊

七一年のヒマラヤも外国隊を圧倒して賑やかに多くの隊が出発したが、いろいろなハプニングがあつて滑り出しは余りスムーズではなかった。

これからまた暫らくの間、何処の隊が何処へ行ってどんなことになったか、順を追ってご紹介していこうと思う。

但しこれらの記録の集収は私人の努力で出来るものではない。いつもの通り、田中栄蔵君、薬師義美君、その他の人々の応援を得ていることをお知らせしておきたい。また資料を直接送って下さった各隊の責任者に対しても厚く御礼申上げる。

(吉沢)

A・プレ・モンsoon

一、高野山大学学術調査隊

活動地域、ロールワリン・ヒマール(上図参照)

連行期間、46115・46424

隊員、松長有慶(隊長、41)、亀岡啓一(副隊長、36)、氏家昭夫(33)、酒主昭之(28)、二上寛弘(27)、高橋一誠(27)。

踏査活動、カトマンズをあとに真東に向い、チャリコット、ドラカを経てポータ・コシのザガットに至り、シムガオン経由でロールワリン・コラの最後の部落ヘディンに達した。その後ヘンデギラ、ドルチバルマ北面の四九〇〇m地点、ピグフェラゴ

北西面五〇〇m地点、リビム氷河等を試登、踏査して戻る。ロールワリン河の周囲の山々を精査している中で写真的な成果も大きいものと思われる。

二、東京アンナプルナ会

アンナプルナ南峰(別名ガネッシユ、七二五六m)試登と連絡官問題

隊員、山田和夫(隊長、25)、石川浩(24)、望月晃(24)——以上JAC会員、田中一芳(22)。

行動概要、ボカラ発(41)、モディ河、仮BC(48、三六〇〇m)、BC(410、三八〇〇m)、L・O、田中、シエルバらチョムロンへ下る(411)、C1予定地の少し下(四二〇〇m)に荷上げ終了(414)、夕方、チョムロンより二名、手紙を持ってBC入り。415、登山活動を一

時中止決定、山田、望月、シエルバ一名、チョムロンへ下る、この日全ての登山を断念することに決定。本隊BC撤収(418)、望月ネパール政府へ経過報告(420)。

連絡官問題の実態

本隊の登山活動中止に関して、日本の新聞紙上(朝日、毎日)に書かれた報道(カトマンズ20日発AFP)を知り、これが事実と全く異なっているの、以下に報告とネパール政府の当該に対する態度を述べる。

なお5月4日ネパール政府はこの外電の伝えた報道に対して、はっきり報道の誤まりを認め、言下に登山断念理由につきL・Oのマッドネス

によるものであると断言し、AFPが伝えたような見解はネパール政府は出していいことを明言した。

(以下その時の真相を略記する)

行進当初L・Oは非常に元気で、隊の後で無線交信を非常なう程であった。高度が増すにつれ多少元気がなくなってきたが、大した異常はなかった。ただ隊員に対して「シエルバやダゴン、チベタン等は非常に悪賢いので注意せよ」とか「彼らは何をするかわからないし、非常に危険である」とかいうことは常に言っており、BCにつく頃には「彼らに殺される」とまで言い出した。

途中ガントルンで夜そとに出て酒を飲み歌を歌っていたことは知っているが、シエルバの話では殆んど毎夜外出して酒を飲みに行ったとのことである。仮BCに着いた八日には突如としてビッケルを投げ、独り言をつぶやき突然笑い出したりし、全然様子が変わった。夜には何度となくテントの外に出て叫び声をあげ、歌ったりテントをたたいたりして、隊員、シエルバとも眠れない状態にした。

九日も同様で態度に全く落着きがなくなり、テントに入ったが独り言をつぶやいたり歌ったりで、以前に比べ目つきも異常になったように思えた。

少しでも低地に下る方がよいと考え、隊員、シエルバ各一名をつけてチョムロンへ下ります。昨年のフランス隊でもL・Oをチョムロンで二ヵ月静養させたそうである。

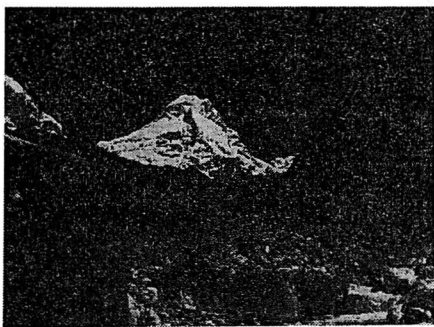
登山活動は四月一日C1(四四五〇m)の偵察を終え、四二〇〇m地点に荷上げを完了し、一日にはC1建設の予定であった。

一日四時頃チョムロンより二名の村人がBCに到着し、フランス人のトリッカー(ジヴィ・ブシェ氏)が、パンチャットに頼まれて書いた英文の



フランス隊 (1971) のセニユールとメレーが登頂したマカルーの西稜。C5から頂上へ、そして下りにビバーク。高橋照氏提供。

なおい行は問題も解決したのでトレッキングに移り、エベレストBC、ゴジュンバ氷河、デシ・ラプチャ越え、ロールワリ谷を経てカトマンズに戻った。その後二カ月はインドを



山岳巡礼クラブ
隊員 中村博之、松坂チアキ
行動概要 横浜 (827)、カトマンズ

メラ・ラのトレッキング

◆一九七〇年ポスト補遺◆
テオ・ティバ (六〇〇一m)
勝山山岳会 (大阪)
隊員、南敷 (隊長、27)、堀口修司 (28)、中川広征 (25)
行動概要、ニエー・デリー (830)、シムラ、マナリ (831)、95、チャンドラ谷BC (98)、登頂 (109、全員及びラマ・タチ、BC (1012) (1015)。

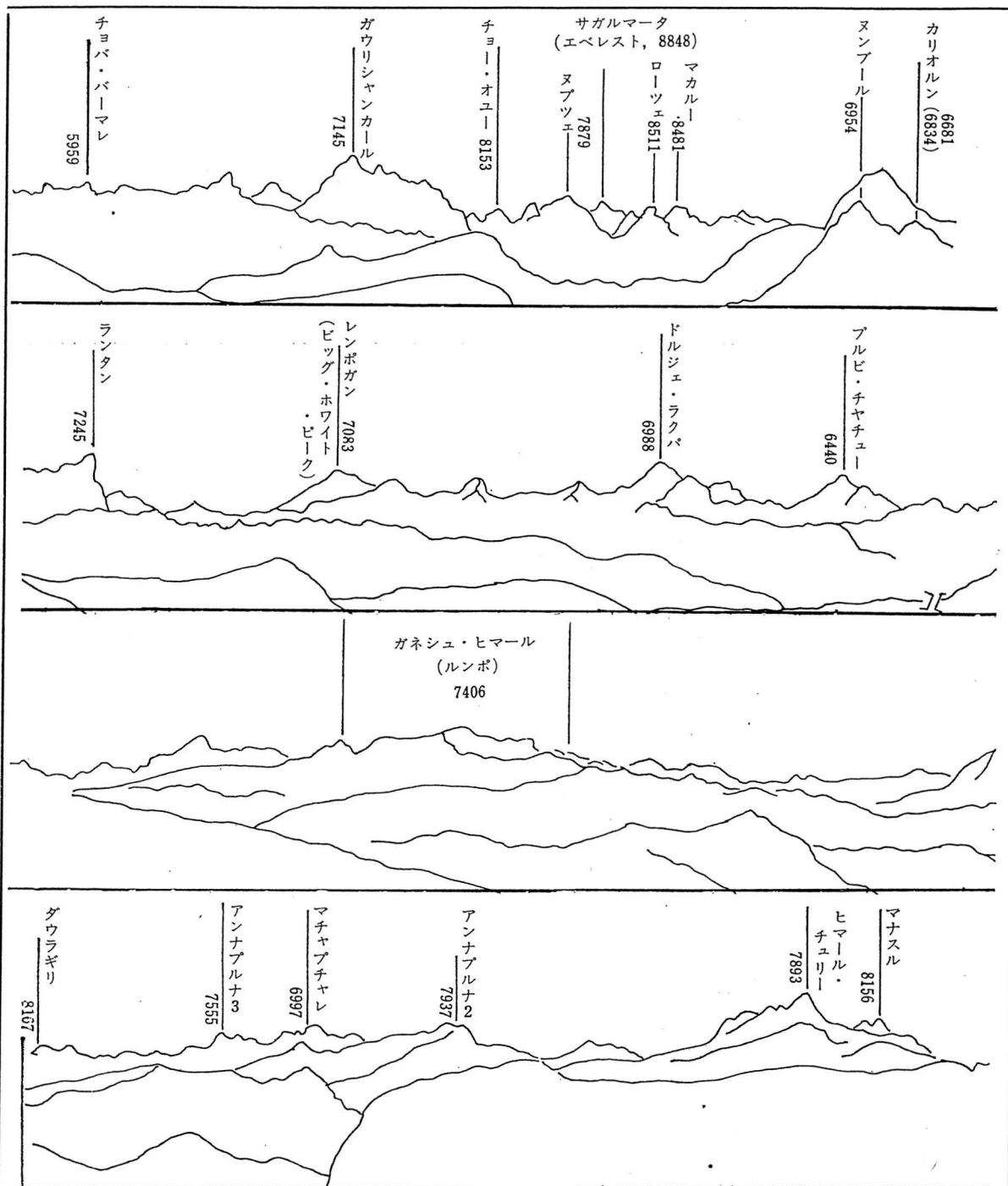
旅行し、秋には再びネパールに戻って、ダウラギリの周辺を歩くことになっていくという。それは六月二〇日付のカトマンズからの手紙によって知った。なおこの報告の紹介並びに私の追記での不十分な点については、近く出る「岩と雪」の二号を読んで頂くことによって多少埋められるかと思う。(吉沢一郎)

ロブソン山 (カナダ)
西面より北西 (皇帝) 稜
第二登 (一九七〇年)
隊員、金沢健 (24)、中村譲治 (21)
行動概要、7・30、バグ湖下流で川を渡り、下部岩壁をルンゼでぬけ、中段スクリーから上部岩壁の下部でC. 31、17ピッチで北西稜、人工登攀4ピッチでC. 8・1、3Pで東西稜との合点、広い尾根、南西壁横断、山稜に戻りC. 8・2、北壁と南西壁の間の氷稜の塔一〇〇個通る。氷冠、頂上、東稜上でC. 8・3、南氷河、ドームへの山稜、ロブソン氷河、水瀑を廻りこみ氷河を下り末端でC. (注・初登は一九六一年R・ペルラ他 (AAT. xii, 235 頁) 生きて帰れたのが不思議なくらいの危険な登攀であった。お陰で下界では大歓迎をうけた。(金沢)

手紙をもってきた。
それによると、われわれのLOはチヨムロンで精神錯乱をきたしており、毎夜戸外に出ては叫び、石を投げ、家々をたたき廻り、作物を荒らしているの、このままでは大きな事件が起きることが考えられ自殺もしかねない。また村人を傷つけることもあり得る。婦人や子供も彼を非常に恐れている。だから誰かが下りてきて、LOを村から出してもらいたい、ということであった。そこでいろいろ考えた末、隊長、隊員、シムルバと三人がチヨムロンへおりました。
チヨムロンでのLOはひどい目つき顔つきに変わっていて驚く。村人は大騒ぎ、食事の時には食物を投げたり敷石をはがして投げたし、隊で与えた装備も川に棄て、紙や金を食べってしまったと口々にうたててくる。

チヨムロンでは村のバンチャットから、LOの行動についてのネパール外務省宛ての手紙 (ネパール文) をもらう。
ガンドルン村ではバンチャットの家に泊ったが、この夜は非常に危険な状態に陥り、シムルバになぐりかかりたり足に噛みついて怪我をさせ、われわれを殺すというようなことを言い出したので、一晩中縄でしばって村人が徹夜で見張っていた。
ここでもバンチャットが政府宛の書面を書いてくれた。一七日は危険なのでビレタレイからポリスを呼び、以後ボカラまで一緒に下ってもらった。
二五日、午前一〇時頃より約一時間、外務省のG・B・シャー氏と会い、バンチャットからの二通の書面を提出し総てを報告した。シャー氏は、①登山活動中止の原因は全くLOの

精神異常によるので再登山を希望するなら新しいLOを再登。②中断の責任は結局政府側にあるので、再度来る意志があるなら登山料はいらない。③LOには給料を払う必要はなく、装備も返却させる。と言ってくれた。
以下略。以上は隊長が五月六日にカトマンズで書いた報告の抜き書きであるが、(編者) (吉沢) がたまたまカトマンズのシャンカール・ホテルに泊っていた時、JAC会員の谷口正彦氏が山田君その他の隊員を連れて来られたのでこの問題の日本における解決方法をいろいろ検討した。
その結果、G・B・シャー氏の言葉を文書にし、日本大使の証明のあるものを作ってくれば、私が日本へ帰った時、適当な解決方法を考えよう、と約束した。
その文書はニエー・デリーの空港で受取った。帰国後のことについては、朝日新聞の五月二日付の記事を見て頂ければわかると思う。



◇ダマンからのヒマラヤ展望◇

ネパールでダマンほど自然の美しさに優れているところはない。カトマンズの南西八〇Kmに当り、高度は約二四三八m、トリブヴァン・ラージバート・ハイウェイに沿っている。

この道を行くと何処からでもとてもいい眺めが得られるし、広々とした溪谷や垂直の断崖、それに移り変わる華麗な自然の切り貼り細工の見られる展望台が沢山ある。

ハイウェイの底、遙か下の峡谷、切り立った断崖と砂岩の谷間から、突こつと独り空を切っているその頂上に立つと、観光者は果てしない風景に暫しわれを忘れるということになる。

地平線の彼方に居並ぶヒマラヤの連峰は、この地球上に類例のない生々とした強烈な印象を与える。これがダマンの天恵である。

ここには観光局で建てた展望塔がある。ヒマラヤの総ての巨峰を見るには、ここくらい優れたところはあるまい。特に北に当って眼に入るバルン溪谷こそは最上の舞台装置といえる。

こうしたダマンで一番よい季節は、冬の天気の良い月(一〇月から一月)であるが、その中でも最もよいのは一月である。二月と三月には色とりどりの野花とネパールの国花、石楠花がいろんな色の花を開き、鳥もまたこれらへの添えものとなる。

ハイカーの楽園としては上の方にシンパンジャンがある。ここはハイウェイの最高点(二五〇〇m)で、冬のさ中には雪もある。

トリブヴァン・ラージバートには急カーヴが沢山あり、年間を通じて旅行者の眼を愉しませる。段々畑のある山々を見るとこの国の人達が如何に勤勉な働き者であるかがよくわかる。

(吉沢一郎)

登山不毛の二年半

日高信六郎

三年まえから急に用事がふえて忙しくなったため、毎日の散歩も月ごとのハイキングもとだえ勝ちになり、山に出かけることがむづかしくなった。それと共に足腰が弱くなったことはわれながら呆れるばかり。結局ときどきここの山行に加わる程度になり下ったので、誌面を借りるのは恥かしいのだが、自慢にならぬ山行の報告でも、期待しておられる会員があることも考え、敢えてご披露いたす次第である。

一昨年（昭和四十四年）は四月に梓会のお老女一行に加わり和木峠から陣馬山に登り陣馬温泉に下った。五月初めに、一人で大丹波から棒の折れ（今は棒の嶺というらしい）に登ったのがこの年唯一の自主的登山だった。名栗に下りたら、飯能の若い二人づれが車にのせたばかりで、途中で友人のところに寄って焼肉やら酒をご馳走してくれるなど、面白い眼にあった。八月上旬三瓶山麓北の原の国立公園大会では山にのぼらず、団体に加わって隠岐に飛び、黒木御所の丘からまわり島山を眺め、国賀の絶壁を船から見上げた。中旬山形で会合のあと、蔵王お釜のふちで一行とわかれ、久しぶりに刈田岳から三笠山まで一人漫歩続けた。ドコ沼への下りにウツカリして鳥兜山の頂上に出てしまったのは可笑しい。十月初め青森から竜鳳峠に往復し弘前を訪ねた。正面に見える岩木山が電光石火の車道に切り裂かれて無残な姿は見るに忍びなかった。下旬は山岳会の仙石原懇親キャンプの翌日に金時登山のしんがりをつとめた。金時神社からのみは四十五年ぶりの再登だが、むかしはもっと急な直登だったような気がした。十一

月井川のもみじ会は雨で峠越えも山歩きもため、新しく開かれた大井川鉄道ぞいのみちを開闢まで歩いて、雲霧の間に隠れる山と峡谷を眺めた。

昨年は二月のジャン・フランコから十一月のモリス・エルツォグまで大ぜいの外国登山家や、韓国・台湾の登山家の歓迎会などいろいろな人々と山際の会話を交わし山岳会のエレスト登山に血を湧かしたのが、ご当人の山歩きはまず貧弱さを加えた。六月のウエストン祭は直前急用ができて行けなくなった代りに、八月中旬松本の高山さんのお世話で中学生の孫と鈴蘭で数日を過ごし、その間に乗鞍に登り高原を歩き上高地を訪ねた。十月西湖畔の山岳会小集会是雨で山歩きはアウト。十一月初めに仲西政一郎さんたちの一行に加わって四国の剣山に登った。バスで山上の国民宿舎まで運ばれた。見の越の上手から頂上近くまで新らたにロープウェイが通じ、バスが峠から祖谷の谷を下って、歩く余地が少なくなったのは驚いた。中旬俣峯水月院のもみじ会では竜川山行きの組に入れたもみじが、例により雨、穂積神社を打止めに平山に下って、野趣満々の鉱泉で近郷の大衆と楽しみを分け合った。

今年は三月に箱根開所跡から少し旧東海道を歩き、芦の湯から旧湯坂道を一人で下った。途中出くわしたのは若い男女の組だ、草に覆われた古い石だたみまで、下刈りをしていたおやじさんと道伴れになって、のどかに下ったのは快適であったが、塔の沢で宿屋のきかない裏手から補装国道に飛び下りるフィナーレはいただけない。四月初めには団体旅行で木曾路を訪れた。車は塩屋峠を越え、鳥居峠の下をくぐる。妻籠でふるい木曾路の旅情を満喫し、馬籠峠で一口飯のあたり古道を少し歩いただけで、御嶽と木曾駒岳

を右左に仰ぎ、お六の櫓、木曾義仲ゆかりの社寺とお墓、藤村にまつわる人々などの傍をしのんだ。五月下旬の第二回山岳会支部長会議に参加して、栗駒山に再登し、湯沢に下りて昔ながらの湯宿の一夜に興じた。五月末には黒四ダムから立山堂にぬけるアルペンルートの開通祝に招かれて、まだ雪ぶかいタンポポの上からトンネルをぬけて室堂平へ運ばれた。たいへん便利になったことは確かだが、ルートの選定や自然の扱いに手荒らなところがあちこちにあって、素直に喜べない。複雑な感想を抱いて富山に下り祝宴に列した。六月初旬の第二十五回ウエストン祭は老翁の武田さん以外歴代の日本山岳会々長と信濃支部長の顔が揃い、雨にもめげず大勢集まって、故人をしのび山の讃歌に耳を傾けた。その後は車で白骨、鈴蘭、黒川渡を新らしく開らけたスーパール林道を通り、奈川温泉に一泊し、翌日野麦峠を越え開田高原に出て木曾福島から鉄路帰京した。便利この上もないが、おおいにも足りない気がした。車道のつけ方に、マイカー族のふるまいにも遺憾なところが多く、野麦峠のあたり森林の伐採が進んで、わびしい風情になった。ただ峠の東西とも車道が旧道とは別の尾根につけられたのは幸いである。峠の小屋（野麦部落の古い宿を移築したもの）の管理人が岐阜側歩道の手入れは怠らぬと答えたのがせめてもの慰めであった。

パイプとコーヒー

月原俊二

「山」三二二号で柿原さんの随筆「山で覚えたパイプの煙り」を読ませて貰い、私も筆欲が湧き、無理な引き合わせかも知れないが「山とコーヒー」も何か因縁がありそうで、それともう一つはペレー帽、これもどうやら柿原さんのいわれる山家のムードづくりに欠かせないものだったと述懐するのである。藤島先生のパイプ談義は余りにも有名だし、福岡県出身で奈良、天理教図書館の福原喜代男さん（関西登高会々員）も、大のパイプ党で、独特のパイプ研究の小冊子を出したくらい、凝った人もおられる。ペレー帽はフランス帰りの画家が愛用したと聞いているが、何時のころから山岳家のシンボルマーク帽になって行った。私の想い出の中では何としても故人藤木九三先生、春陽会の足立源一郎画伯あたりの風貌に刺激された思いがあって、私も山を始めた大正十三年ごろ、神戸滞在中に愛用し始め今日に至っている。ペレー帽談も一稿をあらためるほどの思い出もあるが割愛し、パイプとでも人伍について行くほどのものでもないが、紙巻煙草も半々くらいで喫い続けている。足立画伯のスケッチ山行における足立彦彦、九重の山々を行脚した際分とパイプ談義を聞かされた。カーボンの付け方はジョウギ形、新品には蜂蜜を塗って早目にカーボンを付けること、続けざまに喫わぬこと、つまりボールは温かくてはいけないということ、要すれば一服ごとにパイプを取り替えると一番おいしいとか、またくわえパイプで仕事をせぬこと、吸口に歯形がついてだめになるし、中につばが加ってうまくない。日に一度は掃除して、ジョーシュー音をたてぬこと、細々と注意を承わっても早や二十余年は経ってしまった。その折記念に下さった掃除用具は今日まで失なわずに使わせて貰っている。東京大震災の折、藤島先生はサブザックを背負って避難されたそうだが、ザックの中はパイプだけだった。この話でも足立先生から承わって、頭が下った。パイプ党にとって唯一の願いは、

今の二五〇円の輸入タバコが、自由貿易で関税引下げにとまない二〇〇円台を切ることを願っている。天気続きでタバコ入れの葉がカラカラになるといけないので、レモン汁の切れ端を少し入れておくとうるむの湿りめで宜しいと、岳友末松大助君が教えてくれたので実行している。入れ過ぎると火付きが悪く何ごとともほどどと思っている。それとガスライターで点火はパイプの縁を痛めるので、やはりマッチが好ましい。こんな諸々のことパイプ党は先刻ご承知で笑われるのでこのへんで止めておく。

コーヒーの味を覚えたのは十九歳、これも神戸在住時代、当時毎朝登山（今日も変わらず続けられているが）を市背の再度山に日参し点数稼ぎ（一日一記帳一点）をしたものだった。精進者は年に四五〇点も稼ぎまくった例会登山点数が北アが何十点と累加されるのであった。再度山登山コースの谷筋のおこちの茶店、堂宇に各会毎の署名簿が設置されており、サインし、そしておもむろに小溪のせせらぎを眺めながら、一杯五銭のコーヒーとバター・トースト五銭の味覚は格別であった。今なおこの思い出は舌に喉にこびりついている。

この年になるまでコーヒーを愛飲し続けているが胃腸にもからないので安心して。月に一・五キロ御屋から配達してくれている。余りマニヤ的にキリマンジャロなど要求しない安物である。その代わり喫茶店の一杯百二十円ものコーヒーは飲まないことにしている。四杯飲むと十日間のコーヒー代に匹敵するからである。若い頃は就寝前でも無茶に飲んだものだが、この頃は夕刻後は口にしない。コーヒーが悪いのでなく糖分過剰で酸性体質を助成するのでいけないことを知ったからで、余談にわたるがアルカリ体質その

改造のためには米酢卵子を飲んでい
る。バターはマーガリン、豚肉は極力
避けて野菜食。ついでので酢卵子の
ことを参考までに申しますと、一般市
販のマルカン酢など石炭から造った酢
は酢酸、防腐剤等が入っているで駄
目、純粹の米酢を合コップに卵子
(小型)一個を入れ、三日程経つと卵
子のうす皮が取れる。レモンの輪切り
二、三枚入れ、よく交ぜて五勺を一日
三回に分けて飲む。アルカリ体質改造
は健康保持の素。

コーヒールのことで想い出強く残っ
ているのは、比島戦野に在って、昭和二
十年わが軍の旗色悪く転戦に次ぐ
転戦(退却とはいわない)、とうとう
山下閣下指揮下の軍報道部(当時陸軍
兵長)は、北部ルソンの山岳州山奥深
く(キアンガ南方)進入、手の施し
ようもなく時の至るを待つといった工
合、この頃血なまこになって「カモ
テ(唐手)畑を採し露命をつないだ。
この時、谷間の樹林帯に赤い実をつ
けたコーヒールを見つけた。皮を冷水で洗
い、天日で自然乾燥するものもかし
く、飯盒で焙って石臼で碎いて、砂糖
などは当分恵まれないので、それこそ
生地ブラックコーヒールとしゃれこん
だものだった。

終戦となり、健康であったためP・
Wとして米軍の貨物廠勤務一カ年、こ
の勤務中に粉末コーヒールがレシヨ
ンに袋ずつ運入って、初めて、いま
のインスタントコーヒールというもの
の良いものだと感じた。生のコーヒール
とは全然風味が無く、とくに酸味が無
いので、今ではインスタント・コーヒ
ールは飲んでいない。貨物廠のこと故、
物資は山積してあるで、インスタント
にエメリールミルクを腰カップ一杯に
してガブガブやったものだった。P・
W収容所ではおかゆだったが、勤務先
でいろいろと栄養食を摂(盗)ったの

で、ヒョロヒョロの栄養失調も五十五
キロと体位は回復した。
二十三年正月、足掛け七年振りに祖
国の土を踏んだ。祖国の山河の美し
さ、母の懷に抱かれる思いであった。

袋 一平さんのこと

袋さんの遠逝を知ったのは、ちょう
ど私が北海道の恵山温泉へ旅行して
いるときであった。告別式へも参加でき
ぬので申文を認めて奥さんへお送りし
た。たしか今年戴いた年賀状に、去年
袋さんは肺ガンの手術をされ、辛くも
生命をとりとめることができたという
文言の書かれていたのを思い出した
が、やはり肺ガンで亡くなられたのを
知って暗然とした。

袋さんを知ったのは、むろん戦前の
ことだが、いつのころか今となっては
さだかでないが、同氏が昭和十六年六
月に「霧水園」という随想集を出され
た頃かと思う。また山岳第37年第一号
に載った同氏の「登山再編成論」は、
戦地で読んだ記憶がいまでも残ってい
る。しかし、一緒に山を歩いたのは唯
一回で、それは私が札幌在勤時代のこ
と、昭和三十五年の九月に深田久弥、
風見武秀両氏と三人で北海道の山登り
にやって来られたときである。

利尻島へ渡り、さらに礼文島で礼文
岳や久種湖の近くを探索したのだが、
深田さんの紀行文にもよく描かれてい
るように、いま思い出しては愉しむ旅
であった。山旅が終わってから三氏と
も札幌の私のところでゆっくり休養し
て帰えられた。

毎年袋さんから戴く年賀状には、前
年の山歩きのことなどが克明に記さ
れ、奥さんと一緒に写した写真が印刷
されているものが多かった。山登り
も、よく一緒にされたようだから、
ご主人にさきたれた奥さんのことを

思うとまことに同情に堪えない。
袋さんは本会員のなかでは、数少な
い連邦の山の研究家であり、古くは
会報八〇号に「エリブルース」を、一
〇〇号に「ソヴェート登山家の話」を
寄稿されたり、ベレットスキー「スタ
リン峰登頂記」(昭32・6)や「パ
ラコフ」アルピニズムの基礎」(昭33・
4)などの訳業があるが、同氏にとっ
て定めし喜びに堪えなかったのは、昭
和三十八年秋、グルジアに招かれた彼
の地にわたり親しくカフカズの風物に
接しられたことである。これがキッカ
ケとなって昭和四十一年にはグルジア
からソ連の登山家が来日し、また日本
からもカフカズへの登山隊が出かけた
のだが、これら一連の行事に袋さんは
大きな中心的存在であった。同氏編
『カフカズの山旅』(昭43・2)に詳し
く述べられている。

袋さんは昭和十一年、足立源一郎、
英木猪之吉両氏の紹介で日本山岳会へ
入会、会員番号一六八五、戦後一時会
籍を離れたが昭和四十六年に復活。昭
和四十六年七月二日逝去、享年七十三
歳。ソビエト映画理論の紹介者、児童
文学の翻訳者として知られ、イリ
ンの「人間の歴史」が代表的訳業とされ
ている。(望月達夫)

山崎和一氏

(元会員大正十四年十一月入会九四七
番 昭四十六年七月十一日歿七十二歳
戦前JACの虎ノ門時代、小集会、
講演会、晩餐会、土曜日のクラブルー
ムなどに、山崎君はよく顔をみせた。
開成中学、第八高等学校、東京帝大
を経た同君がそれぞれの学校山岳部時
代の仲間であったに違いないが、JAC
のメンバーとしても、みんなから親
しまれた存在だった。
彼の山あるきについて、私は殆んど
知るところはないが、彼が「山の本」

を愛しこれを集めていたので、好い話
相手のひとりだった。日本の文献は勿
論だが、アルプス、ヒマラヤ関係のも
の、英国の書店から取寄せ、ヒマラ
ヤの地図はロンドンのスタンフォード
へ頼めばくる、と教えてくれたことも
あった。その彼が今大戦のあと、東
京の町も、勤め先も、山の事も、山仲
間も一切を棄てて茨城県石岡町へ、隠
遁してしまつた。爾来ときに手紙の往
復はあったが、ついに再び相見する機
会はなかった。「近頃はむかし夢みた中
央亜細亜やヒマラヤのことを翻訳本で
たのしんでいる」と書いてきたことも
ある。

計報に接してまたひとり古い友をな
くしたかと、私は寂しい想いである。
(一九七・一七・十七 藤島敏男)
因みに拙著五〇三ページのJAC創
立三十周年記念晩餐会の写真中、前列
左から二人目が山崎君である。

図書室便り (昭和46・7)

図書受入報告

(1)岩間正夫編『世界山岳百科事典』
昭和46
茗溪堂寄贈

(1)北大山の会編『日高山脈―自然・記
録・案内―』昭和46
文部省登山研修所寄贈

(1)文部省登山研修所編『登山指導の手
びき』昭和46
木野樗氏寄贈

(1)吉野照道・木村雅昭・上田豊・島田
喜代男著『ガネッシュの蒼い水』
昭和41

(2)ワルテル・ボナッティ著 近藤等訳
『わが山々へ』昭和41

(3)ヘックマイヤー著・安川茂雄訳
『世界山岳全集10』昭和35

(4)チャールズ・エヴァンズ著 島田巽
訳

訳『カンチエンジュンガーその成
功の記録』昭和32
(5)諏訪多栄蔵著『マッターホルン
四つの岩稜と四つの岩壁の初登攀』
昭和33
(6)京都大学山岳部『インドラサン登
頂』昭和39
(7)川崎隆章編『登山講座―第六巻―』
昭和34

(8)ガストン・レビュファ著、近藤等訳
『モンブランからヒマラヤへ』昭和
31

(9)長越茂雄著『谷川岳研究』昭和29
加藤武三氏寄贈

(1)加藤武三著『広島をめぐる山と谷―
山毛榉叢書第17集―』昭和46

(2)加藤武三著『ひろしまハイキング手
帖1―観光とハイキング―』昭和
43

(3)加藤武三著『ひろしまハイキング手
帖2―緑への招待―』昭和43

(4)加藤武三著『ひろしまハイキング手
帖3―白銀への招待―』昭和44

(5)加藤武三著『西中国山地―山毛榉叢
書第15集―』昭和44

(6)加藤武三著『比婆・道後・帝釈―山
毛榉叢書第9集―』昭和40

横山厚夫氏寄贈
(1)横山厚夫著『東京から見える山見え
た山』昭和46

定期刊行物受入報告
(部報・会報)

(1)長崎山岳会『あしあと』(46・7)

(2)山崎民俗の会『あしな』No. 128
(46・6)

(3)広島山の会『山毛榉林』No. 176,
177 (46・5, 6)

(4)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 50
(46・1)

(5)国立公園協会『国立公園』No. 293
(46・6)

(6)京都山岳会『京都山岳』No. 555
(46・1)

(7) 東京野歩き会『山道』No. 495 (46-7) (8) 日本自然保護協会『自然保護』No. 109 (46-6) (9) 坂口孝夫『山道』No. 73 (46-7) (10) 東京都山岳連盟『山岳連盟』49年 1号 (11) 日本山岳連盟『山岳連盟』No. 27 (46-6) (12) 日本山岳連盟『山岳連盟』No. 159 (46-7)	"The American Alpine Journal" 1960; 1961 N. 2; 1962 N. 1; 1963 N. 2; 1964 N. 1, 1965 N. 2; 3. Toni Hiebeler. tr. by Hugh Merrick. "North Face in Winter" 1962 4. Fosco Maraini. tr. by James Cadell. "Karakoram-The Ascent of Gasherbrum IV" 1961 5. Toni Hagen. tr. by E. Noel Bowman. "Mount Everest" 1963 6. Captain Richard Grant. Annapurna II 1961 7. Fosco Maraini. tr. by Peter Green. "Where Four Worlds meet" 1964 8. "Bernese Oberland and Central Switzerland" 1963 9. Wilfrid Noyce. "South Col" 1963 10. Christoph von Fürer-Haimendorf. "The Sherpas of Nepal" 1964 11. Wilfrid Noyce. "Climbing the Fish's Tail" 1968 12. Walter Bonatti. tr. by Lovett F. Edwards. "On the heights" 1964 13. Peter Avery. "Modern Iran" 1965 14. Herbert Tichy. tr. by Basil Creighton. "Cho Oyu" 1967 15. Wendy Hall. "Green Gold and Granite" 1957 16. Max Eisselin. tr. by E. Noel Bowman. "The Ascent of Dhaulagiri" 1961 17. Barbara Mans. "High road to Hunza" 1968 18. Heinrich Harrer. tr. by Hugh Merrick. "The White Spider"	1961 19. Curtis W. Casewit. "Guide to Western Skiing" 1967 20. Erich Vanis. "Im steilem Eis" 1963 21. Gaston Rébuffat. "Mont-Blanc" 1962 22. Edward C. Pyatt. "Where to climb in the British Isles" 1960 23. David Wall. "Rondoy" 1965 24. Lionel Terray. tr. by Geoffrey Sutton. "Conquistadors of the Useless" 1963. 25. Ronald W. Clark. "Mountaineering" 1956 26. David G. Leach. "Phododendrons of the World" 1962 Journals Arrived in July 1971 1. "Die Alpen Zeitschrift" 47 Jah. Quartal 2. 2. "Die Alpen Monatsbulletin" No. 5, No. 6, Mai/Juni 1971 3. "Alpinismus" 1971-6, 7. 4. "Appalachia" Vol. 37. No. 7. June 1971 5. "La Montagne et alpinisme" 96 année No. 81 Février 1971 6. "The American Alpine Journal" V. 17 No. 2. 1971 7. "Der Bergsteiger" 38 Jah. Juni 1971 8. "Deutscher Alpenverein Mitteilungen" 23 Jah. Mai/Juni 1971 9. "Deutscher Alpenvereins" Vol. 96 1970 10. "Mountain" No. 15 May 1971 11. "Rivista Mensile" Anno 92 No. 4 April 1971 12. "U.I.A.A." No. 44 Mai 1971	図書委員会報告 七月十四日(水) 午後七時(談話室) 山崎、伊倉、横山、近藤、武田、大橋、伊藤、堀内、野上 一、「山岳創刊号」の復刻の件 九月八日の委員会、横山委員が印刷屋の報告をす。 二、図書交換即売会の件 ルーム日誌(46年7月) 2日(金) 学生部例会 5日(月) 学生部会計委員会 7日(水) 校門山岳会 8日(木) 理事評議員会 12日(月) 医療委員会 13日(火) 海外連絡委員会 14日(水) 図書委員会 15日(木) 校門山岳会 16日(金) 第二十三回小集会スケッチ教室 16日(金) 同右第一教室 17日(土) ビールバーデー 19日(月) 学生部集會 20日(火) 名簿委員会 21日(水) 校門山岳会 23日(金) 校門山岳会 27日(火) 第二十四回小集会「ベナス」報告会」高橋 照氏 28日(水) 婦人懇談会 七月中来室者 五一九名	(7) 東京野歩き会『山道』No. 495 (46-7) (8) 日本自然保護協会『自然保護』No. 109 (46-6) (9) 坂口孝夫『山道』No. 73 (46-7) (10) 東京都山岳連盟『山岳連盟』49年 1号 (11) 日本山岳連盟『山岳連盟』No. 27 (46-6) (12) 日本山岳連盟『山岳連盟』No. 159 (46-7) 【雑誌】 (1) 『ペン』No. 161 (46-7) (2) 『登山』No. 34 (46-3) (3) 『登山』No. 290 (46-8) (4) 『登山』No. 395 (46-8) (5) 『登山』No. 98 (46-7) 【雑誌・その他】 (1) 東京慈恵会医科大学山岳部『登山』No. 71-51 (2) 長崎県山岳連盟『山岳連盟』No. 71 (3) 日本山岳連盟『山岳連盟』No. 71 (4) 『AMKAS』東京山岳連盟『山岳連盟』No. 71 (5) 千葉工業大学山岳部『山岳連盟』No. 71 (6) 日本山岳連盟『山岳連盟』No. 6 (7) 東京電機大学『山岳連盟』No. 72 (8) 北海道大学山岳部『山岳連盟』No. 72 1. B. Arthaud 氏著『Alpinisme Moderne』 1. Swiss Foundation for Alpine Research "The Mountain World" 1955; 1956/57; 1958/59; 1960/61; 1962/63; 1964/65 2. The American Alpine Club	11. Wilfrid Noyce. "Climbing the Fish's Tail" 1968 12. Walter Bonatti. tr. by Lovett F. Edwards. "On the heights" 1964 13. Peter Avery. "Modern Iran" 1965 14. Herbert Tichy. tr. by Basil Creighton. "Cho Oyu" 1967 15. Wendy Hall. "Green Gold and Granite" 1957 16. Max Eisselin. tr. by E. Noel Bowman. "The Ascent of Dhaulagiri" 1961 17. Barbara Mans. "High road to Hunza" 1968 18. Heinrich Harrer. tr. by Hugh Merrick. "The White Spider"	1. "Die Alpen Zeitschrift" 47 Jah. Quartal 2. 2. "Die Alpen Monatsbulletin" No. 5, No. 6, Mai/Juni 1971 3. "Alpinismus" 1971-6, 7. 4. "Appalachia" Vol. 37. No. 7. June 1971 5. "La Montagne et alpinisme" 96 année No. 81 Février 1971 6. "The American Alpine Journal" V. 17 No. 2. 1971 7. "Der Bergsteiger" 38 Jah. Juni 1971 8. "Deutscher Alpenverein Mitteilungen" 23 Jah. Mai/Juni 1971 9. "Deutscher Alpenvereins" Vol. 96 1970 10. "Mountain" No. 15 May 1971 11. "Rivista Mensile" Anno 92 No. 4 April 1971 12. "U.I.A.A." No. 44 Mai 1971	15日(木) 第二十三回小集会スケッチ教室 16日(金) 同右第一教室 16日(金) 同右第二教室 17日(土) ビールバーデー 19日(月) 学生部集會 20日(火) 名簿委員会 21日(水) 校門山岳会 23日(金) 校門山岳会 27日(火) 第二十四回小集会「ベナス」報告会」高橋 照氏 28日(水) 婦人懇談会 七月中来室者 五一九名
---	--	--	--	--	--	---	--

会員名義変更

四一四八 気象庁山岳部を大井正一と変更

復活会員

三八〇〇 奥村邦夫 八王子市長房町一五六二―二〇

退会者(46年7月)

六一五七 久地岡サナエ

六四一三 芦沢智子

物故者

四三二六 家田千尋 昭和四五・九・二七逝去

一六八五 袋 一平 昭和四六・七・二逝去

ペルー登山について連絡

在日ペルー大使館より、ペルー登山について次のような連絡があった。

× × ×

本官はここにペルー国大蔵省国税局長より発せられた決定指示第五一四三号の英訳をお送りします。これは日本からペルーへの登山および科学調査隊が持参する諸道具の一時持ち込み許可に関するものであります。この通知が貴会にとり有益なものであり、かつ多くの日本の方がペルーを訪問され、この便益を利用することにより皆さんがすべからぬ技術を実行に移して下さることを心からお祈りします。

六月十一日

在日ペルー大使館

ホセ・カルロス・マリブテギー

Directoral Resolution No. 5143
In View of Dossier "M", No. 21421-DGA of the Ministry of Education (Offs. No. 0412/71 and DGTUR No 0148-71) of the General Bureau of Tourism on temporary internment permits;
In accordance with the reports of the Technical and Legal Advisory Office for Exemptions of this Bureaus.

IT IS HEREBY RESOLVED.

LET the Customs of Callao, "Jorge Chavez" International Airport, Lima Post Office and Matraní Port be HEREBY AUTHORIZED so that, by analogy with the provisions of Chapter 26^o of the Custom Procedural Code, they can permit the temporary entry of the equipment that the mountaineering and scientific expeditions from Germany, Australia, Bolivia, Brazil, Canada, Checoslovakia, Spain, France, Great Britain, Italy, Japan, Mexico, Poland, Switzerland and the United States of America, bring with them for the purpose of simultaneously carrying out the sport of scaling mountains and scientific studies in different ranges of the Peruvian Andes; The dispatching Customs must require the inventory and guaranteeing of the respective duties, the payment of the fees for services rendered and the drawing up of the Temporary Entry Policy referred to in Supreme Resolution No 0192-68 MC/AL of February 16 1968, made more clear by Supreme Resolution No 0370-68 MC of April 2, of the same year.

Also the aforementioned Customs shall permit the free entry of the medicines and food supplies for the amounts required by the aforementioned expeditions.

Let this be recorded and executed by the respective Customs. (Sgd) CORONEL FAP. LUIS GALTANO CHAPMAN-DIRECTOR GENERAL OF CUSTOMS.

(右英訳からの翻訳)

決定指示第五一四三号一九七一年五月五日

一件書類「M」すなわち文部省よりの第二一四二一―DGA(第〇四二一/71とDGTUR第〇一四八/71)および観光総局の荷物一時保管許可に関するものを検討した結果さらに本局(大蔵省関税局)の税除外に対する「技術的、法的勧告委員会」よりの報告にもとづき次のように決定した。

カイヤオ港、ホルヘ・シヤベス国際空港、リマ郵便局およびマタラン港の税関当局に次のことを許可する。

関税手続規則第二十六章を準用して上記に所在する税関当局は日本(ほか十四カ国は略)よりの登山および科学調査隊がペルー・フンデスにおける諸地域で、登山と同時に科学調査を行なおうとする目的で、自から携行してきた装備類の一時持ち込みを許可すること。

所管税関当局は、携行品目の完全なリスト、ならびに諸取り扱いの手数料および一時的持ち込み許可の文書作成(一九六八年二月十六日付NO・〇一九二一六八MC/AL最高指令と、これをさらに明確化した同年四月二日付最高指令NO・〇三七〇一六八MC/AL〇三七〇一六八MCに定めるところによる)に要する諸公費と諸支払いに対する保証をあわせて要求しなければならぬ。また上記諸税関当局は上記

の諸隊の必要とする量の薬品および食糧の自由持ち込みを許可すべきものとする。

本件を正式に各関係税関に直達し実施させること。

関税局長 L・G・チャップマン

第二二一回小集会 六月十五日と六月二十九日の二回にわけ山里昇男氏を講師に午後六時半から本会ルームでスケッチ教室を開いた。

第二二二回小集会 七月一日午後六時半から九段会館でエベレスト国際隊帰国報告会を開き、植村直己、伊藤礼造両隊員の報告があり、昨年度の日本山岳会エベレスト隊の映画「エベレストへの道」を上映し盛会であった。

第二二三回小集会 七月十五日、十六日の両日にわたり午後六時半から本会ルームで山黒寿男氏を講師に第二回スケッチ教室を開いた。

第二二四回小集会 七月二十七日午後六時半から本会ルームで高橋照氏からマナスル西壁登頂の報告会があった。スライドと映画が上映され盛會であった。

本政府九隊に登山許可

ネパール政府は八月十七日、ネパール政府に提出されていた一九七一年ポスト・モンズン期のネパール・ヒマラヤ登山申請に対し、千葉大隊のマカル二峰(七六四〇m)など日本の七隊と、アルゼンチンのエベレスト登山隊、イランのアンナプルナ四峰登山隊の計九隊に登山許可を出した。登山許可された日本隊は次の通りである。

▽千葉大隊(沼田真隊長ら七人) マカル二峰(七六四〇m)

▽日本山岳会関西支部隊(住吉仙也隊長ら九人) ダクラ・ヒマール(七五〇九m)

▽東京山旅クラブ隊(柴田勇隊長ら四人)カンジロバ(六八七七m)
▽大阪府山岳連盟隊(阿部和行隊長ら六人)カグマラ(六四五八m)
▽九大山岳会隊(白水隆隊長ら六人)ダウラギリ五峰(七六一八m)
▽千葉工大隊(西崎泰隊長ら九人)アンナブルナ南峰(七二一八m)
▽長野山岳協会隊(清水澄隊長ら九人)ガンガブルナ(七四七九m)

エベレスト登山 三年まで申請受理

ネパール政府は八月十七日、エベレスト登山申請はすでに一九七三年まで受理されていると発表した。

受理された登山隊は次の通り。

▽一九七一年(ポストモンズン)アルゼンチン隊
▽一九七二年(プレモンズン)西ドイツ隊
▽一九七二年(ポストモンズン)イタリヤ調査隊
▽一九七三年(プレモンズン)イタリヤ本隊
▽一九七三年(ポストモンズン)日本ロック・クライミング・クラブ

秋のアルゼンチン・エベレスト隊

一九七一年秋のアルゼンチン・エベレスト登山隊は、ポスト・モンズンにおける最初のエベレスト登頂を目指して八月十四日ラマサングからキャラパンを開始した。一行は隊長ヘクター・カティバ・トロサ(Hector Catina Troso)中佐以下十六名で、ポーター四百人、隊荷十二トンという大部隊である。(AP)

マカール頂上の日章旗

ロベール・バラゴ隊長ら十一人のフランス登山隊は、西稜からのマカール第三登に成功したが、五月二十二日ヤニック・セーニエール、ベルナル・メル両隊員が、雪のたがった山頂に達すると、一九七〇年春東南稜からマカール第二登に成功した日本山岳会東海支部隊が頂上に残してきたピッケルと日章旗を発見した。

フランス隊はこの日章旗の代わりにフランスとネパールの両国旗を置き、日章旗を持ち帰ったが、ビナヤ記者の写したこの日章旗の写真が、七月六日外務省を通じ本会に送られてきたので、このほど東海支部へ送付した。

台湾玉山登山計画

わが国と中華民国とは深い関係にあることは御承知の通りであります。同国の登山は戦後異常の発達をとげ、昨年は山岳協会、台北登山会その他全台湾の山岳会が大同団結して中華全国山岳委員会を結成し、三千名の会員を擁して台北市に事務所を設け盛んな活動を続けています。同国からは隔年にわが国に登山隊を派遣して日本国内を周遊し、日華親善の実をあげています。日本山岳会は同国の招聘に応じ、登山隊を編成し、十月九日から九泊十日の日程で玉山登頂を行ない、後有志により雪山(次高山)の登頂も行なう計画である。(平沢竜一郎)

あとがき 八月は理事会も休み、事務局の岩佐、佐々木、池内の三氏にも順ぐりに休暇をとってもらって会も半ば夏休みの体勢となりましたが、山荘、名簿の両委員会、それに集会委員会だけはかわらぬでした。山荘委員は自転車振興会への交付金申請の手続きでてんでこまい。おかげで小生も八月十五日の数馬の小集会にも行きそびれ、

☆会報製本御引受け☆

製本代 (251号~300号) 金 700 円也
送 料 別 受 け 金 120 円也

ナカバヤシ株式会社

東京店・文京区水道2~15、電話(943) 0311 (代表)
大阪店・都島区相生町7、電話(352) 3491 (代表)
名古屋店・昭和区雪見町1~15、電話(731) 7331 (代表)
工場：大阪工場(堺市)、東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい▶

九月には早々こんどは上高地のレンジャーへ増改築の申請をしなければならず、これまたひと仕事と覚悟しています。神河内山荘のことについては一段落つき、見通しが立ったところで会員各位にくわしく御説明申し上げることにしております。

(山崎)

昭和四十六年九月十日発行

東京都千代田区神田錦町

三二三 向井ビル

発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 山崎 安治

(293) 七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

森林・草原・氷河

加藤泰安著

〈A5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著

〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著

〈B6判334頁〉定価960円

山の古典と共に

大島堅造著

〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著

〈A5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著

〈B5判206頁〉定価2,800円

日高を歩き続け、日高を愛する北大山の会の人々が綴る日高山脈の全て。

日高山脈

北大山の会編

〈菊判362頁〉定価2,200円

山岳

日本山岳会編

〈A5判〉

総索引	1,000円
64年	2,000円
63年	2,200円
62年	2,000円
61年	1,800円
60年	1,500円

国立公園カレンダー

国立公園協会編

〈A5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

〈B6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

〈A6判126頁〉1集240円・2集280円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著

〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

〈A変型208頁〉定価3,600円

アンナプルナ日記

京都大学学士山岳会編

〈A12取変型判170頁〉定価1,200円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

〈A5判350頁〉定価900円

キンヤンキッシュ1965

東京大学カラコルム遠征隊編

〈B5変型判220頁〉定価3,000円

南極新聞1956～7年

南極研究会編

〈B5判横トジ〉定価600円

登山・スキー用具専門店

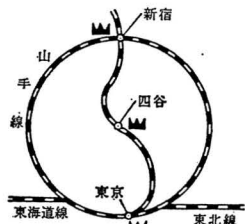
●買いやすい
山の店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 **たかはこ**

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番



かたろぐシンティ
でんや 281-8456
中央区・八重4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘



東京店・中央区日本橋2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スター店
大阪店・北区御橋上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 34440